

稀代の好色文学者とされる一方で、日和下駄をはき、雨傘を杖代わりに曳き、隅田川下流域の東京の下町に残る江戸文化の名残を探し求めて歩き回り、日記という密室的書記空間において、大正・昭和初期の時代風俗と人情の変化・推移を克明に観察・記述するかたわら、国家や軍部の悪を痛烈に批判、弾劾した反社会的、反時代的、反骨の文学者永井荷風は、その文学人生のある時期、慶應義塾文学科の教授として、フランス語とフランス文学及び文学評論を教え、多くの文学者を門下生のなかから輩出させた、優れた教育者でもあった。日本の近代文学者のなかで、門下生から多くの文学者を生み出したという意味で、荷風は、寺田寅彦や小宮豊隆、森田草平、芥川龍之介、内田百閒などを、その門下から出した夏目漱石と並ぶ稀有の教育者であった。にもかかわらず、文学教育者としての永井荷風については、教え子たちが折に触れて書き残したものが断片的に残されているだけで、トータルにその実像が復元され、成し遂げた仕事の大きさがしつかりと検証され、評価されたことはこれまで一度もなかった。

本書は、反社会的な「性」の文学者、永井荷風が持つ社会的な一面に光を当て、大学教師としての荷風の真面目を明らかにすることを通して、西欧文化のモダニズムと反モダニズムとしての日本の伝統文化の世界を横断的、且つ循環的に往還を繰り返しながら、独自の文学世界を

構築した永井荷風の多義的、多面的本質を浮かび上がらせるとともに、荷風の警咳けいがいに接し、「三田文學」を通して、文学者として立つ契機をつかんだ久保田万太郎や水上瀧太郎、佐藤春夫、堀口大學らがどのように固有の文学的表現世界を構築したか、さらには永井荷風の存在が、のちの「三田派」／「三田文學派」の文学者にいかなる影響を与え、荷風の文学精神が慶應義塾文学部と「三田文學」の歴史と伝統のなかでどう引き継がれていったかを検証する、初めての試みと言えるものである。